

# 最新事情

高校編②

生徒の気付きを促す  
豊富な体験・体感の場

## 宮城県石巻北高等学校

平成22年の総合学科への改編に伴い、生徒の多様な進路実現が可能となった宮城県石巻北高等学校。同校では「人の数だけ道がある」「めざせ！地域のスペシャリスト」のスローガンの下、将来を具体的に考えるための豊富なセミナーや社会との接点を持つ機会がさまざまな形で取り入れられている。生徒一人一人の気付きを促す、同校の取り組みを伺った。



宮城県石巻北高校



進路指導部の大沼容先生

### 外部講師を招くセミナー 生徒の意識の変化に期待

「こんにちは」。校内に明るい声が響き渡る。宮城県石巻北高校の生徒たちである。友人と話しているときでも来校者や先生が前を通ると話を止め、きちんと目を合わせてあいさつを交わす。あいさつ指導の取り組みが盛んであるという印象を受けたが「以前よりあいさつを自分からできる生徒は増えましたが、まだまだ声は小さいです」と、同校進路指導部部長の大沼容先生の目標レベルは高い。

同校は今年の春に1期生が卒業したばかりの新しい高校であるが、創立は大正13年と80年以上の歴史を誇る。数度の校名変更を経て、平成22年に普通

科と農業科から五つの系列を擁する総合学科に改編し、校名も石巻河南高等学校から石巻北高等学校に改めた。

系列は食農系列、家庭系列、経情（経営情報）系列、教養系列、進学系列があり、2年次になると生徒はそれぞれの進路に沿った系列で専門知識を学ぶ。多くの総合高校では入学してすぐに系列を選択するのに対し、同校では2年次に進級するときに系列を選ぶ。

中学を卒業したばかりの生徒たちに自分自身の将来像はつかみにくいという、地元の中学校からの声を反映させた形だ。そこで同校では自分の進路をより明確にするために、1年次の「産業社会と人間」でさまざまなセミナーを開催。職業理解を深めるために、外部から職業人を招いて講座を開くなど、将来を考える機会を設けている。

さらに、同種のセミナーは2、3年次でも継続的に開催する。2、3年次では「総合的な学習の時間」を活用。自分の将来像を具体的にイメージし、同時に社会人としての意識を育む場としている。その中で特徴的なのは、講師を招いてマナー指導を重点的に行っていることだ。それについて、大沼先生はこう話す。

「社会への意識が低く、制服の着こなしやあいさつの大切さを十分に理解していない生徒が多いものですから、早い段階であいさつや身だしなみの意識付けをさせたいと思ったのです」。

1年次は入学して間もない5月に「制服着こ



2年生はインターンシップ前、3年生は就職活動の前になると服装やマナーのセミナーに参加する。外部講師を前に気を引き締める生徒たち



なしセミナー」を開催。2年次はインターンシップ直前に、参加する意義や心得を学ぶ「進路講話」。3年次は就職を間近に控えた生徒が多くなることから、希望職種別に一般企業の方を招いて講演を行っている。

セミナーに外部の講師を招くことの効果について、大沼先生は「やはり実社会で働いている方のお話には説得力があるのでしょうか。生徒たちは熱心に耳を傾けます」と話す。

校門でのあいさつ指導や校内での声掛けなどを通して、生徒への意識付けに力を注いでいるが、指導の成果がなかなか現れない状況があったからだ。

「生徒にとって教員はとても近い存在ですか

ら、服装を注意してもそのまま聞き流してしまいうことがよくあります。そこで、外部講師を招いてセミナーを開催し、身近な社会人（教員）ではない社会人に着こなしセミナーやあいさつの大切さを話してもらおうと、生徒たちは『先生から毎日注意されていたことは、やっぱり自分たちに必要なことだったのだ』と気が付くわけです。気付きを与えて、自ら正そうとするきっかけになるところがこのセミナーのメリットだと思います」（大沼先生）。

生徒たちはこれらのセミナーを通して社会を身近に感じ、社会人としての意識を育んでいく。

## インターンシップは社会と関わる機会に

先述した2年次でのインターンシップは、5月に全員が参加する。就労体験は2日間で希望する職種や職業を実際に体験し、進路を具体的に考える機会として行われている。生徒たちはここでマナーの必要性をより大きく実感するそうだ。

「インターンシップの期間はとても短く、具体的な仕事の内容を掘り下げて体験することはできません。中には希望の職種ではないところに体験に行く生徒もいますし、仕事の内容自体は大きな問題にはなりません。それ以上に大切なのは、生徒たちが社会に触れる貴重な体験の場となることです。

生徒たちはインターンシップを通して、社会

で働くとはどういうことか、や、社会の厳しさ、を体感しますし、その中であいさつの必要性やコミュニケーションの大切さを学んでいきます」（大沼先生）。

インターンシップに参加後、学校側は受け入れ企業先にアンケートを行う。そこで指摘されるのはあいさつに関するところが一番多いと大沼先生。このような指摘は学校側としては大きな課題であると言う。しかし、それに生徒自身が気付くことがインターンシップのよさでもあると大沼先生は続ける。

「生徒の感想を読むと、企業の方からの指摘と同様に『あいさつが自分からできなかった』などの反省点が多く見受けられます。体験することで自分に足りないものは何かを認識することが、インターンシップの大きな教育的効果ではないでしょうか。

インターンシップは生徒たちにとって、社会で働くことへの関心や意識付けに欠かせない要素となっているようだ。

この就労意識の高まりは秘書検定の導入からも垣間見ることができ、同校は昨年（平成24年）の11月に初めて秘書検定3級を導入。経情系列の3年次を対象に「課題研究（ビジネス）」の中で実施した。秘書検定の導入を提案した内海聡先生は「秘書検定を通してビジネス社会の一員として必要な心構えを身に付けさせたいと思ったのです」と狙いを語ってくれた。

最新事情 ②……宮城県石巻北高等学校

月に2、3回水曜日に開店する「とら・ま・い」



商品は商品開発から加工まで全て校内で行う。  
一番人気は「米粉パン」



経情系列の生徒は会計を担当。  
接客も同時に学ぶ



山崎賢一先生

学びの成果を発表する場  
「とら・ま・い」

あいさつや身だしなみを整えることは、地域の方々との交流もより円滑にする。

校内に設けられた交流広場販売所「とら・ま・い」は月に2、3回のペースで開店。地元の方々が長蛇の列を作るほどの人気店である。

店舗名の「とら・ま・い」とは、同校の所在地である石巻市鹿又地区に伝わる伝統芸能「虎舞」を由来とする。主に2、3年次の生徒が中心となって運営に当たり、系列の枠を超えた交流や学びの成果を発揮する場として平成23年度にオープンした。

「とらまい」を生きた教材として、店舗経営をする上で必要な経営や商品の知識を身に付けてほしい。これがこの取り組みの大きな狙いです」と語るの是指導を担当する山崎賢一先生。

同校はもともと農業科を有した高等学校。これまでにも野菜や花を育て校内外で販売する取り組みは行われてきたが、総合学科への改編が可能となった。「食物の生産から販売までを校内で行うことで、生徒たちは物流の仕組みを体感できます」と山崎先生はうなずく。

食農系列は野菜や米、花の栽培と食品加工。家庭系列はエコバック（新聞紙を使った）製作や販売する野菜の特徴を生かしたレシピ作りを取り組んでいる。経情系列は店頭での会計や接客を担当する。学校活動とはいえ、経営を伴う大事な仕事。お客さまに商品を説明するスキルや接客態度の教育も大切である。しかし、同校ではマニュアルはあえて作らず、生徒たちが自ら学ぶ機会を重視している。

「商品知識は自分で調べたり授業で習ったことを活用して自ら学ぶことが大切。ですから商品に関するマニュアルはありません。それは接客

に関しても同じです。教えられたことをただ繰り返すのではなく、実際に店頭立ちお客さまと接することで、立ち居振る舞いを覚えていくのです」（山崎先生）。

初めて店頭立つ生徒は、お客さまに声を掛けられなかったり、あいさつの声小さかったり。教員が後ろから背中を押すこともあったそうだが「徐々にお客さまへの接し方が分かってきたようです」と山崎先生は顔をほころばせる。「特に地方の高校は外部と関わる機会が少ないので、とらまい」での交流を通して人との接し方を身に付けてもらいたい」と山崎先生は期待を込める。現在は教員の監督の下で、運営を行っているが、山崎先生は「今後は生徒たちだけで店舗経営ができるようになることが目標です」と展望を語ってくれた。

先生方のお話の中で繰り返し「気付き」という言葉を聞いた。今回ご紹介した三つの取り組みは一見関連性がないように見えるが、生徒たちが体験・体感し、生徒たちの気付きを促す大切な場となっている。

「新体制になって3年。初めての取り組みばかりだったので、教員は試行錯誤しながら続けてきました。生徒たちがより学べる環境が整ってきたこともあり、あいさつや身だしなみなどの意識も身に付いてきたようです」と大沼先生は振り返る。

先生方や地域の方々に見守られ、生徒たちは将来に向けたステップを確実に歩んでいる。